

こんにちは、サーマルタンクの新洋技研です。お元気ですか？「寒さ暑さも彼岸まで」という言葉がありますが、どうもそれは過去のものとなり、服装も「合服」がいらなくなつて夏服か冬服だけで良さそうな気候になってきてしまつていくようです。6月に入つてから軒並み7月下旬くらいの気温が続き、今年も酷暑の様相を見せています。熱中症にはくれぐれもお気を付け下さい。

さて、今回はちょっと堅苦しい話になってしまふと思いますが、お付き合いいただければ幸いです。政権が交代し半年を経過しました。世情は前政権時代から比べれば、動きを見せていると言えらると思ひます。バブル崩壊以後、長きにわたり低迷してきた日本経済を立て直していくことは、短いスパンでは到底できることではないでしょうから、コロナと政権が代わることなく腰を据えてやつてほしいものですね。

総務省の調べによれば、日本の中小企業数(会社数+個人事業者数)は、約420.1万社、全企業数に占める割合は99.7%。とのこと(ただこの中小企業の中には大手企業の子会社も含まれています)

語弊はあるでしょうが「日本経済の屋台骨を背負つていく中小企業を活性化させる」という大義の元に、ものづくり支援などの補助金制度や海外進出支援にかかる調査事業の委託など、様々な策が打ち出されてはいて、これをうまく活用して開発を行つたり海外進出の橋頭保を築く企業もあると思ひます。

今後このような制度は打ち出されてくることでしょう。ただこれらの制度を利用された方は実感されたことでしょうか、とても面倒で時間を取られるため、なかなかハードルが高いこともまた事実だと思ひます。公の資金を使うわけですから当たり前と言われればそれまでですが、このハードルがあるが故に中小企業と一口にいつてもそれなりに人材を揃え、対応できるところしかこれらの制度を利用できない、もしくは指導することのできる人材とのつながりがある、もしくは業者に委託できるところしか応募できない、と言つて良いのではないのでしょうか？

結局は制度をつくる官僚が中小企業の実態を知ることとせずには杓子定規に作つていふ言つても良いのではないかと思つてしまふのです。それでは本当の意味において中小企業の活性化にはつながらない、ひいては日本の活性化にはなつていかないのではないかと思ふこの頃です。とまあ、とりとめの話をしてしまいましたが・・・めげずに、したたかに生きていくしかありません！

日本の野鳥シリーズ

ヒヨドリの曲芸

技術営業部 佐藤 弘

自然の餌が乏しくなる期間限定で庭に来る小鳥に餌を与える人たちは、招かざる客ヒヨドリを可愛げがないという。動物は図体が大きいモン勝ちだから、彼らはか弱い小鳥を追い払って輪切りのミカンやリンゴにパンの耳など、食い逃げ同然に餌台にあるものを食べ尽くして行くらしい。「アンタらに用意したんじゃないッ」と、それこそ追い払いたいという。私だったらひと言つて足す「ゼニ置いてけ、こらア」。

一方、本種はバードウォッチャーからも「うるさい」と嫌われる。「ヒーヨ」と鳴くからヒヨドリの名がついたと言うが、群になつて鳴き交わすとけたたましい音量になり、他の鳥の声がほとんど聞き取れないからだ。救いは、思わず聴きほれる歌い手ぞろいのある程度標高の高い領域には、たぶん彼らの餌の関係で進出していないことだ。「アンタら、里山より奥に入っちゃ絶対にダメ」と釘を刺しておきたい。

本種オスの脚にリングを装着して記録し、リリースした。その個体が波状飛行する先にはフェンスがあるのに、一向に高度を上げない。思わず「バカ、激突する」と叫びそうになったが、何事もなくテキはフェンスの網をくぐり抜けた。網目の寸法を測ると54mm角であり、また、試みに測つた他のオスの翼をたたんだボディサイズは、ほぼ50mmの丸だった。通過できると判断した寸法感覚と、いかに飛ぶのが商売とはいえ、微妙に位置をコントロールできる飛行技術には感服する。もっとも、周りに天敵が多い自然界では間一髪が生死を分ける毎日だろうから、彼らにとってこの程度のことは朝飯前なのかもしれない。

さて、この春も調査地の松林のあちこちで山桜が見事に咲いた。そこから20kmほど離れた角田山またはそれに連なる弥彦山辺りから、鳥が運んだサクランボの種が芽を出したものだろう。すかさずメジロの群が訪れ、花の中に顔を突っ込んで密をなめる。メジロは花の受粉を手伝っているわけで、実つたサクランボをまた鳥が運んでくれるから、桜には有益な存在だ。ヒヨドリも押しかけるが、連中は花を丸ごと嘴でむしり取つて花びらを食い散らす。まったく可愛げがない。

本種の姿はやや尾が長すぎのバランス感はあるものの、日本画の題材にしたらかなかの渋い絵になるだろう。と思つたら、日本固有種だということから外国人鳥キチはこんな鳥でも珍しがららしい。

“ちょっと一息” “日本酒の会”



No.9

事業部 卜・新規事業 PJ 山本知男

今年の春にクラリネット・コンサート（通称クラコン）と言うのを開催しました。新潟県内の一般バンドに所属しているクラ吹きの有志が集まって演奏会を行ったものです。会の最後に総勢50名近くのメンバー全員の合同演奏を行ったりで、仲間内ではかなり盛り上がったものでした(^_^)。ま、終われば当然打ち上げになるわけで（それが楽しみなんで）そこで呑みながら、またまた盛り上がったものでした。呑む事が大好きなメンバーなんで、呑み放題で大盛り上がりしたのですが、見渡すと大体がビール、カクテル、酎ハイといったところで、日本酒を呑んでるメンバーってのは少人数で、男は私一人で女の子が5~6人という感じでした。（最近は何故か女の子の方が日本酒呑むようですね。）そこで日本酒の良さをもっと広めようって事で“クラコン日本酒の会”を作る事になり、私が会長を務める事になりました。（なにせ男は私一人だし、職業柄、日本酒に関してはナンダカンダとウンチクを言ってるので(^_^)）会則としては、宴会時は日本酒を呑む、そして美味しいお酒の情報を教え合う、最後にこの仲間でお酒に関する音楽を演奏する事、となりました。と言う事で今度何を演奏するかと言う話題になったんですが・・・、「椿姫～乾杯の歌」、「ドンジョバンニ～シャンパンの歌」、「酒とバラの日々」、「森高千里～気分爽快」、「ビギン～島唄」等々、いろいろ出たんですが・・・日本酒じゃないねって感じで、日本酒に限定すると「八代亜紀～舟唄」、「美空ひばり～悲しい酒」、「吉幾三～酒よ」・・・やっぱり演歌か～、日本酒には演歌でしょうかね。結局は「椿姫～乾杯の歌、気分爽快、長淵剛～乾杯」のメドレーにする事になって今度演奏します。

どんな感じになるかは、お楽しみ???



◆ ちょっと豆知識 ◆ その16



「4-VG」

技術営業部 部長 成田 護 (mamoru@shinyo.co.jp)

最近、「4-VG」なる言葉をよく見聞きします。

当社にも、4-VG 関連の相談が寄せられるようになってきましたが、その多くは、「自社清酒中に 4-VG が検出された。指導機関から蔵内の殺菌を徹底するよう言われたがどうしたものか？」といった内容です。

「釈迦に説法」とは思いますが、改めて「4-VG」のおさらいをしてみましょう。

4-VG とは「4-ピニルグアイアコール」。清酒における 4-VG は「燻製臭」の原因物質として知られ、原料である米由来のフェルラ酸に Bacillus 属の微生物などが作用し生成するようです。汚染源としては様々なことが言われていて、麹室や枯らし場の空調機器のフィン部分、ドレンパン、麹用の敷布、床台、麹室の壁、等など。また、ある指導機関の先生によると、Bacillus 属は常在菌なので、放冷機で米の堆積層を通過する空気も十分汚染源になり得る、とのこと。

ご承知のように、Bacillus 属の微生物は芽胞を形成するため、強い薬剤耐性を持っています。

恐らく業界で一番使われている殺菌剤である逆性石けんは、芽胞菌にほとんど効果が無いと言われてます。麹室だとカビ臭の問題もあるし、塩素系の薬剤は使いたくない。ホルマリンは効果があるようですが目がシパシパするから嫌だし、オゾンも効果を示すのに一定の条件が必要なようだ・・・。

「じゃあどすりゃいんだよ!!」との声が飛んできそうですが、私どもも空調機器を取り扱う者としては看過出来ない問題でありますので、現在調べを進めているところです。

「これが解決策です」とご紹介できる情報には未だ辿り着けていませんが、興味深い情報は集まりつつありますので、お役に立てる情報をお伝え出来るかも知れません。

4-VG でお困りでしたら、一度弊社までご相談下さい。

エッセイ

六本木と麻布行ってきた

生産部 島貫 修一

六本木駅の出口の階段を上がり地上に出たら、目の前に赤坂のミッドタウンタワーがそびえ立っている。高いなあ。更に六本木交差点を右に曲がり芋洗坂を下って行くと、右手からヒルズの森タワーが威風堂々と迫ってくる。久しぶりの六本木・麻布散策はタワーを見上げることから始まったが、頭上の風景が一変しているのに、足元の風景は全然変わっていない。それは坂の多い地形。芋洗坂・大黒坂・暗闇坂・七面坂・狸坂・仙台坂など長短の坂が入り組んでおり、この坂の上（下）には何があるのだろうかと思いを踏み入れてしまう。坂の途中の日向で猫が寝ていたりすると、つい近寄ってカメラを構える。

もう一つ変わってないのが多国籍な雰囲気。暗闇坂を上っていたら左側に落ち着いた感じの建物があり、門を見たらオーストリア大使館だった。大黒坂で周囲を撮っていると、暗闇坂方向から欧米系の若い女性が来たので、素早く彼女をスナップショット。もしかしてオーストリア国籍かな。同じく欧米系の男性が一人でベビーカーを押しているのを見たが、自然な感じで街並みに溶け込んでいた。ピーコックストア麻布十番店の前でも、西アジア系の外国人家族が自転車で買い物に来ていたし、店名もローマ字で表示されていた。

この街で出会った外国人は、ここに住んでいますよ、仕事していますよ、家族と暮らしていますよといった生活のにおいを漂わせており、まさしく住人そのもの。それに対して私はといえば、カメラ片手にうろろしながら、目に付くもの珍しいものを撮るのに夢中。日本語と英語併記の区の掲示板に感心したり、外国人とすれ違う度に「わあ外国人だ」と意識したりで、こちらの方が異邦人のようだった。

